

## 大学における子育て支援 —地域・人との繋がりを深める子育て支援—

宇都宮共和大学子ども生活学部「親子遊びの会」4年

菊地 葵（きくちあおい）、高橋 のりか、海野 史帆、大友 歩未、竹尾 毬愛、西川 綺華、根本 桃華

**【概要】** 宇都宮共和大学子ども生活学部における子育て支援活動「親子遊びの会」の実践研究について報告する。親子が楽しめるイベントの改善をくり返すなかで、①親子ともに充実する支援内容、②子どもの自己表現を促す活動、③安心できる受容的な働きかけが重要であることが見出された。また、活動の提供が、学生にとって保育実践の学びとしての意義があることが分かった。

**【栃木を元気にするには】** 宇都宮市の Kodomom フィットネス、小山市のとちぎ多胎ネットと連携し、保護者や子どものニーズを学ぶ→子育てサークルの保護者と遊びのプログラムを開発する→親子がともに笑顔で楽しむ・子どもと学生が遊ぶ間安心して相談ができる→活動を通して学生は環境構成、教材研究、子どもの援助を学ぶ→実践力をつけて保育者として現場に出ることができ、地域の親子に還元できる。また、子育てサークルなど地域交流を強化し本大学が保護者にとって憩いの場になる。この循環が地域の子ども・保護者・保育者から栃木を元気にすると考える。

### 1. 「親子遊びの会」の意義と目的

宇都宮共和大学「子育て支援研究センター」事業のひとつである「親子遊びの会」（以後、本会）では、子どもの遊びの支援、親子関係の支援、家族同士の繋がりを作り支援を目的にさまざまな遊び・活動を行っている。本会は、教員のサポートや助言をもとに、学生スタッフが主体的に活動スケジュールや環境構成、制作等に携わり、実際の運営も行い、直接、子どもと保護者への関与も経験できることで、学生の保育実践力やコミュニケーション能力などの養成に繋げることも、本会の目的となっている。

### 2. 本会の概要

参加者は、地域の子育て家庭であり、子どもの年齢は主に 0 歳～6 歳である。活動は、親子で過ごす時間、保護者と教員の懇談、子どもの遊びの時間で構成される。親子で過ごす時間には活動のテーマを設け、学生は活動の計画と準備、当日の運営、遊びの支援を行う。学生は、自主的に参加している 1 年生～4 年生である。

### 3. 昨年度活動実績

昨年度の活動実績は、右の通りである。

第 1 回	5/7	親子イベント「忍者ごっこ」
場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス		
第 2 回	11/26	親子イベント「親子フィットネス」
場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス		
第 3 回	12/11	親子イベント「お正月遊び」
場所：ミナテラス		

### 4. 本研究の目的

本会では、毎活動の満足度が高いことから、リピーター率が高い。また、感染症の拡大から、子育て支援に求められるニーズの変化や地域との連携が薄れているよう思われ、本研究では以下の目的を設定した。

- ① 子育てサークルと連携し、保護者と子どものニーズがどのように変化しているのかを知る。
- ② 親子のニーズに適した活動を運営するための方法を開発する。
- ③ 子どもが主体的に遊び、親子で楽しむために、学生が行うべき援助、配慮とはどのようなものかを検討する。

この 3 つの目的について、プログラムの検討、教材研究及び実践と省察により明らかにする。

### 5. 方法

#### (1) 子育てサークルとの連携

2023 年度の活動テーマを『地域・人との繋がり』とし、地域の子育て支援団体・サークルなどとも連携し、地域の子育て支援ニーズを掘り起こしつつ、本学が地域の子育て支援の拠点のひとつとして役割機能を充実させることを目指している。具体的には、昨年度連携した宇都宮市の子育てサークル『Kodomom フィットネス』に加えて、新たに小山市の子育てサークル『とちぎ多胎ネット』と連携し、共同研修を重ね、地域のニーズに適した活動、環境構成、教材などを検討し、親子が主体的に参加し、楽しめることを目標としたイベントを計画・実施する。

#### (2) 実践

今年度は 3 回の親子イベントを計画・実施する①5/13「ぐりとぐらのアスレチック」②11/4「親子フィットネス」③12/3「お正月遊び」である。また、地域子育てサークルの保護者と共同会議や共同研修(8/19)を行う。

#### (3) 省察

活動後に毎回ミーティングを行い、学生、教員が実践について検討・考察を行った。

### 6. 結果

#### (1) 第 1 回活動実践

ここでは 5 月の活動について報告する。第 1 回の活動のテーマは、『ぐりとぐらのアスレチック』であった。「親子で体をたくさん動かす」をねらいとし、体育館でサーキット遊びを行った。コーナー遊びとして、5 つの遊びを学生が考え実践した。

- a. フラフープコーナー

床の上に置かれた大きさが異なるフラフープを跳んだり走ったりして渡る。始めは、跳んだり走ったりして渡る子どもが多かったが、途中からはフラフープをトンネルに見立ててくぐったりフラフープを投げて遊んだり遊びが進展していく様子が見られた。

#### b. 段ボール崩し

始めは慣れていないからか手を使って段ボールを崩す姿が多かったか、慣れてくると蹴ったり体当たりしたりして段ボールを崩すなど全身を使って活動をしていた。学生が段ボールを積むのを見て、子どもが興味を持ち、真似して積んでみたり、新しい積み方を見つけたりするなど、工夫しながら遊ぶ姿が見られた。

#### c. 巧技台

バランスを取りながら渡る。始めは慎重に渡ったり、保護者と手をつないだりして渡っている子どもが多かったが次第に走って渡ったり巧技台の上で体を揺らして遊んでいる様子が見られた。途中で巧技台から落ちてしまった女児がいたが、また巧技台の上に登って最後まで渡りきるなど挑戦する姿が見られた。

#### d. トンネル

始めはトンネルの前まで来ると怖がって入れない女児がいたが、保護者がトンネルの透明な部分から顔を見せると安心してトンネルに入る姿が見られた。途中からは、トンネルが怖いものではないということが分かり、自らトンネルに入れるようになっていった。また、トンネルの透明な部分から顔を出し学生と笑顔で手を振って遊んでいる様子も見られた。

#### e. 秘密基地

始めはゴールすることが嬉しく、メダルをもらって保護者に見せに行く姿が見られたが、2週目からは秘密基地の壁に自由に絵を描く姿が見られた。少し不安になると窓からのぞいて保護者の姿を見ることで安心して遊びに戻り、学生と一緒に楽しそうに絵を描く姿が見られた。

### (2) 子育てサークルとの共同研修

子育てサークルとの連携を深め、本会の活動の意義や本研究の目的を全体で共有し、結束力を強め、新たな運営方法の可能性を探ることをねらいとし、子育てサークル『とちぎ多胎ネット』の方々と多胎児を育てる親の困難感や子育て支援ニーズについて共同研修を行った。(写真3) (8/19)。また、本研修の成果として多胎児家庭向けの親子フィットネスイベントを11月に開催する運びとなった。現在は、11月に開催予定である親子フィットネスについて、講師との打ち合わせや企画・運営の検討、学生サポートの方法、事前準備などについて、協議を重ねている。

『子育てサークルの意義と課題』:8月19日(金)にとちぎ多胎ネットの南部裕子先生、山本緑先生に依頼し、現代社会の多胎児を育てる保護者のニーズの変化や子育て支援ニーズ、保育者に期待していること、子育てサークルと大学が連携する意義について研修を行った。

日本では現在、年間に出産する女性の100人に1人が多胎児を出産していること、その点を踏まえて多胎児家庭も利用しやすい育児支援が重要であることを学んだ。また、今まで一人っ子や、きょうだいのいる子どもとは親子遊びの会での活動に関わることができていたが、多胎児とはあまり関わったことがなかったため、研修を通して多胎児の生活や子育て支援のニーズについて知ることができた。また、これから保育者になってからは子育て支援をしていく立場になるため、多胎児と関わる際に積極的にコミュニケーションを取っていくことで、些細な心境の変化にも気づいていけるようにしていきたいと感じた。

### 7. 考察

今年度前半の活動から、子育て支援を行うためには、様々な子育て支援の団体やサークルと連携を広げることで、新たな子育て支援のニーズを知ることが大切であることを学んだ。また、保育者としても個々の家庭の支援ニーズを知り、具体的な支援方法を考えていくことが求められていることを学ぶことができた。子育てサークルのイベント運営方法について学ぶことは、本会だけでなく、保育の計画や準備、運営、遊び支援を学ぶことになり、学生にとっても大きな意義がある。

### 8. 結論

本会は、子育てサークルと連携したことで、幅広い子どもの発達支援、保護者支援、親子の関係性支援としての効果がより強まると推測する。学生は、親子フィットネスについて実践的な学びを得ることができた。また、パンフレット製作を通して、親子のニーズに適した情報について学ぶことができるといった地域人材育成の効果があると考えられる。親子に寄り添った活動が充実するプログラム開発を行うことは、親子にとってもメリットであり、学生にとってもメリットがあることが分かった。そして、学生が遊び活動を企画し、実践していく中で活動方法によって親同士の交流を活性化したり、親子の関わりを広げたりするような効果が得られることが考えられる。この活動を通して、子どもに即して環境構成を新たに創造する力や活動を振り返りながら新たな可能性を検討する力、保護者の想いを理解し支援方法を考える力などが向上したと考える。

### 9. 今後の課題

- ・地域の親子に寄り添った実践が行えるよう、子育てサークルとの連携を継続していく。
- ・親子の交流や子ども同士の交流、親同士の交流が活性化できるようなプログラム開発に向けて学生同士の学び合いを深めていきたい。
- ・子育て支援団体や子育てサークルのネットワークの仲介的な役割を果たせるような方策を検討したい。



(写真1) 段ボール崩し



(写真2) 巧技台



(写真3) 共同研修